

二〇一五バルトン忌講演会

シャーロック・ホームズはスコットランド人だった

— 謎と冒険に満ちた名探偵の世界へようこそ —

* 田 中 喜 芳

【酒井】 本日は、暑い中、お集まりいただきありがとうございます。バルトン忌では、バルトンにちなむ、いろいろな講演会を、毎年というわけではありませんが、これまで何度もやっています。バルトンさんは、わが国の大切なインフラである上下水道の礎を築かれた恩人ですが、写真家でもあり、いろいろな分野において、日本でのネットワークもお持ちの方でした。また、バルトンさんの生い立ちを調べていくうちに、幼小のころ、コナン・ドイルがバルトンさんの家にお世話になっていたことも分かりました。

本日は、わが国のシャーロックキアン (Sherlockian) の第一人者であられる田中喜芳先生に、「シャーロック・ホームズはスコットランド人だった」というタイトルで、幼少のころのバルトンとコナン・ドイルの関係から、シャーロック・ホームズ・シリーズの中で何度かバルトン親子が登場するといったお話をいただきたいと思えます。では、よろしくお願いいたします。

シャーロック・ホームズと私

皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました

た田中喜芳です。本来ならシャーロック・ホームズのトレードマークであるインバネスケープを着るのですが、さすがに真夏の今日は持つてきませんでした。ホームズの定番といえばデアーストーカー（鹿撃帽）とパイプ、虫眼鏡、インバネスと言われています。ところで、ホームズの定番になったこのキャラバツシュパイプですが当時はまだありませんでした。これはポア戦争のあとに英国に持ち込まれたパイプで、米国のホームズ役者のウィリアム・ジレットが舞台上でこれを用いたことから一躍定着しました。本日は一時間半という短い時間ですがシャーロック・ホームズ・シリーズの魅力と、作者コナン・ドイルとバルトンの友情についてお話をさせていただきたいと思っております。皆さん、今日はお忙しいところお越しにいただいたので、お話だけでなくご覧にいたい貴重本等も持ってまいりました。どうぞご期待ください。



おなじみのホームズスタイルで講演される田中喜芳博士

まず、皆様の中でシャーロックキアンという言葉をご存知の方はいらっしゃいますか。何人かいらつしやいますね。シャーロックキアンというのはシャーロック・ホームズの熱烈なファン、あるいは研究者を指している言葉です。昔はシャーロックキアンといっても知らない方も多く、シャーロキ菌に感染しちゃった人ですかと言われたりしましたけれども、今はそんな

なことはありません。ちなみにシャーロックア
ンは、主にアメリカや日本で使う言葉で、本
国の英国ではホームメジアン (Holmesian) と言
っております。

まず、コナン・ドイル (1859-1930) が書いた
「ホームズ物語」とは何かということからお話
をさせていただきます。今申し上げたように世
界中にはシャーロックアンがたくさんいます
が、さてどのくらいの人数がいるかとなるとこ
れは不明です。ただ研究団体は六〇〇以上ある
と言われています。

そして、それらの団体はほとんどが会報を出
しています。例えば、英国のロンドン・ホーム
ズ会 (Sherlock Holmes Society of London)
は、年に二回『シャーロック・ホームズ・ジャ
ーナール (Sherlock Holmes Journal)』を出し
ています。また、米国にはベイカー・ストリー
ト・イレギュラーズ (Baker Street Irregulars
通称 B S I) という世界最古の、そして最高権
威を誇る研究団体がありますが、こちらは年四

回、季刊で会報を出しています。ただ最近の傾
向としては紙の冊子は少なくなり、電子メール
の添付で会報が送られてくるようになりまし
た。

日本にも日本シャーロック・ホームズ・クラ
ブ (Japan Sherlock Holmes Club 通称 J S H
C) というファン・クラブがあり、現在、会員
数は約八〇〇名を有しています。今、私がして
いるネクタイは J S H C の公式ネクタイです。
余談ながら、私がデザインをして横浜・元町の
由緒ある洋服屋でつくってもらったものです。
また、胸につけているバッジは小さくてご覧に
なれないかもしれませんが彫金をやっている
友達がつくってくれた世界でただ一つのもの
であり、自慢の一品です。

先ほどインバネスの話をしましたでしたが格好を
見ただけで分かるという人物は恐らく世界で
三人だけ、シャーロック・ホームズとチャップ
リン、日本で言う鞍馬天狗ですが、鞍馬天狗
に関しては最近の学生たちに話すときが「は

あ？」と怪訝な顔をしますので時代は変わったと実感しています。

「ホームズ物語」とは

「ホームズ物語」と言っても、実はそういう単行本があるわけではなくて六〇編のシリーズを総称して、われわれシャーロックアンのように呼んでいます。この六〇編の作品の中で最初に出たのが長編 *A Study in Scarlet* です。《緋色の習作》、あるいは《緋色の研究》と言われている作品で一八八七年に出たものです。名探偵シャーロック・ホームズと相棒のワトスン医師が世の中にデビューしたのがこの作品です。一般的にワトスン「博士」と呼ばれています。あるシャーロックアンの研究によれば、彼の学歴と職歴ではどうやっても博士号は取れなかったということですから、我々シャーロックアンの「ワトスン医師」とか「ドクター・ワトスン」といっております。

その《緋色の習作》を掲載したのは『ビート

ンのクリスマス年刊 (*Beeton's Christmas Annual*)』です。今、皆さまに御覧入れているものは残念ながら本物ではありません。本物は世界で一二冊しかないと言われています。これは一九八七年、登場一〇〇周年を記念して世界で五〇冊だけ復刻されたうちの一冊です。ですから、これも今では世界で五〇冊しかない貴重本です。これは、当時まだ存命だったコナン・ドイルの娘さんのジーン・コナン・ドイルさんが送って来てくれたものです。

《緋色の習作》でホームズが一躍人気を得たわけではありませんでした。一般的には誰からも注目をされなかったと言われています。しかし、近年、英国のあるシャーロックアンの研究により、必ずしも誰からも注目されなかったという訳ではなく一部の新聞にはすぐく好評の書評が出たことが分かりました。当時、ロンドンから一時間ぐらいの港町、ポーツマスで開業医をしていたドイルが最初に書いたホームズ作品ですが、地元ポーツマスの新聞には「わが

町のコナン・ドイル博士が生み出した名探偵シャーロック・ホームズは何と素晴らしいことかと、こういう書評が出ております。決してドイル地元の新聞社ゆえというわけではなく、遠く離れた「グラスゴー・ヘラルド (Glasgow Herald)」紙も「科学的な探偵が誕生した」という賛辞を贈っております。そのほかいくつかの新聞も好意的な書評を出しています。この「科学的な探偵」という賛辞はドイルにとって一番の褒め言葉だったのだろうと思います。というのは、ドイルはそれまでもいくつか探偵小説を読んでいたので、ある日突然、探偵がひらめいて犯人を捕まえてしまうとか、そういうスタイルがすごく多かったのです。ドイル自身も「作品の中で読者にデータを提供して、その手掛かりをもとに犯人を捕まえるという科学的な探偵を生みだしたかった」と言っております。

今日は、ドイルの肉声が聞けるインタビュー映像を持ってまいりましたので、それを御覧に

入りたいと思います。もとは米国のシャーロックキアンが送ってくれたVHSですが、最近はDVD版も市販されています。これから御覧に入れるのは『アーサー・コナン・ドイル全集』の中に含まれているドイル六八歳のときの映像です。コナン・ドイルは一八五九年五月二二日にスコットランドの首都エディンバラで生まれ、一九三〇年七月七日にイースト・サセックス州クロウバラの自宅で亡くなっています。ですから、七一年の生涯となります。亡くなる三年前、一九二七年にクロウバラの自宅でインタビューを受けたものです。それ以前はサイレントのものしかなくてトーキーがなかったものですからドイルの肉声が入っている映像はこれ一本だけです。

このDVDには、ほかのドイル作品もいくつか収録されています。その一つ、SF小説の「ロスト・ワールド (The Lost World)」は、映画「ジュラシック・パーク」「ジュラシック・ワールド」等のまさに原点といえる作品です。ド

イルは探偵小説だけではなく広い分野の小説を書いていますが、その一編がSF小説の「ロスト・ワールド」です。

インタビュー映像でドイルも言っていましたように、シャーロック・ホームズを実際の人物だと思っている人が当時はたくさんいたようです。が、これは何も当時だけのことでなく、二〇〇八年に英国のテレビ局が三〇〇〇人を対象に行ったアンケートでは、何とシャーロック・ホームズが実在の人物だと思っている人が六割ぐらいいたそうです。反対にチャーチルとナイチンゲールは架空の人物だと思っている人が約二割いたそうです。どこまで正直に答えているのかわかりませんが、それほどシャーロック・ホームズは存在感があるということなのでしよう。

『ホームズ物語』の魅力とは

《緋色の習作》でホームズが一躍人気を得たわけではないことはすでにお話ししました。次に

出たのが《四つのサイン》(The Sign of Four)という作品です。一八九〇年に『リップニコット・マガジン』(Lippincott's Magazine)という雑誌に生まれました。今日持参したのが『リップニコット・マガジン』の本物です。これは非常に珍しい本で、日本で形がきちんとしたものはこの一冊だけです。世界でも二〇冊ほどしかないと言われています。

アメリカのベイカー・ストリート・イレギュラーズの会合に行ったときに、隣にオースチン博士という人が座っていて、博士がこれを持っているのは知っていました。そこで「もし博士が亡くなったら、私にこれを譲ってくれるように奥様に言っておいてくれませんか」と言ったら、本当に三年か四年経って奥様から手紙が来たのです。「キヨシが買わなかったらオークションに出すけれども、どうだ」という内容でした。そんなお願いをしたこともすっかり忘れていて、届いた手紙にびっくりしました。値段もびっくりするものでしたが、奥様の厚意があり

がたくて入手しました。でも、これは今、私が預かっているだけだと思っっています。この一冊をきちんと次の代に伝えていかなければと思っっています。

それはともかく、一八九〇年に米国の雑誌『リッピンコット・マガジン』が英国でも発刊されることになり、英国へ渡ったストッダートという代理人が二人の作家を呼びました。一人がコナン・ドイル、もう一人はオズカー・ワイルドでした。当時、オズカー・ワイルドはもう著名な作家でした。ストッダートは一八八九年八月三〇日の夜に二人に会い、何か作品を書いて欲しいと依頼しました。ドイルの日記を読むと八月三〇日の夜にオズカー・ワイルドに会ったことは書いてあるのですが、ワイルドの研究者に聞くとドイルに会ったことは書いていないそうです。

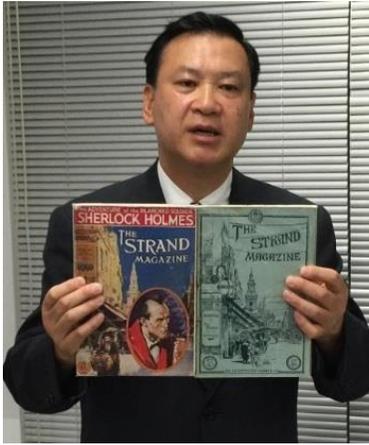
話は少し戻ります。《緋色の習作》はドイルが最初に書いたホームズ作品であるのは申し上げたとおりです。当時、ドイルはいろいろな

ところに原稿を送ったのですが、結局、本にならなかったのです。それで約一年間出版を待つのであれば『ビートンのクリスマス年刊』に掲載するという条件で、著作権ごと二五ポンドで売ってしまったのです。著作権料込みですから、あとはいくら売れてもドイルのもとには一ペニーも入って来ませんでした。当時のポンドを今の円に換算するのは非常に難しいのですが、二五ポンドというのは今の約六〇万円になります。

二作目の《四つのサイン》はストッダートとの話で一〇〇ポンドの原稿料がもらえることになりました。一気に四倍に上がったのでした。このとき、ワイルドが『リッピンコット・マガジン』に書いたのが「ドリアン・グレイの肖像」です。ただ、残念ながら、この二作目の《四つのサイン》でも、ホームズが一躍人気者になったというわけではないのです。シャーロック・ホームズ・シリーズが爆発的人気を得たのは、一八九一年に創刊された『ストランド・マガジ

ン (The Strand Magazine)』という月刊誌に連載が始まってからでした。

本日は当時の『ストランド・マガジン』の本物をもってまいりました。一八九一年九月号(写真右側)と一九二六年一月号です。『ストランド・マガジン』が今残っているというのは、もちろんシャーロック・ホームズ・シリーズを連載した雑誌ということもありますが、月号、ストランド街が表紙に描かれていて、一八九〇年当時はまだ単色で一九〇〇年代になるとカラーになります。馬車も車に変わっています。ですからこの雑誌をずらっと並べると、ス



ホームズ・シリーズを連載した『ストランド・マガジン』

トランド街の変遷が表紙から分かるのですね。

もう一つ、『ストランド・マガジン』が雑誌の世界で歴史に名を残す理由があります。それは、今、どのような雑誌を広げても、両ページが全部活字で埋まっている雑誌は一つもないはずです。どのページにも必ず絵とか写真が入っていますが、そういう様式を初めてつくり出したのが『ストランド・マガジン』なのです。

ホームズ・シリーズがこの雑誌に連載されて一躍人気を得た大きな理由の一つは、ホームズの卓越した推理力・行動力で次から次へと難事件を解決していく面白さでしょう。これは、皆さんが指摘される理由ですが、その他、例えば欧米などでは、ホームズとワトソンの男の友情の教科書だと言われております。

その他、ヴィクトリア朝のノスタルジーを感じるというのには、二一世紀に生きる我々の考える魅力であって、当時の人たちは決して郷愁は感じていませんでした。今、自分たちの目の前にある世界が描かれているに過ぎないからで

す。

一〇〇人に「ホームズ物語」の魅力を聞けば、一〇〇通りの答えが返ってくるのだらうと思います。私は、決してホームズの活躍だけではなくヴィクトリア朝の様子が非常によく描かれていることも大きな魅力の一つだと思えます。「ホームズ物語」には登場人物が一〇〇人以上あります。皆さん御存知のように英国は階層社会ですから、物語には浮浪児の少年から国王まで出てくるのですね。いろいろな人たちの人生の機微が描かれて、ヴィクトリア朝の様子が非常によく描かれているというのも大きな魅力の一つだと思っています。

あと忘れてならないのは一話完結というスタイルです。主人公は毎回同じでも依頼人が新しく現れ、毎回読み切りで話が完結するということは、この雑誌を一回買い損なっても次に買うときにまったく不自由がないということですね。毎日、朝の連続テレビ小説を楽しく見ているのですが、一週間見ないともう何が何だか分

からないというのは皆さんも経験があることだと思っています。

それから、ヴィクトリア朝も末期になってきますと労働者の生活程度も上がってきて、雑誌をやるだけの余裕も出てきました。さらに識字率が高くなったというのがあります。字を読める人が多くなり雑誌の値段も安くなった。英国中に鉄道網が敷かれるようになり雑誌が一気に販売されるようになった。そういった幾つかの社会的な要因も人気の後押しになったと思います。

こうしてシャーロック・ホームズが爆発的人気を得たわけですが、今日お配りした「ホームズ物語」一覧表の二六番目に《最後の事件(The Final Problem)》というのがあります。実はドイルは探偵小説作家ではなく歴史小説作家になりました。映像の字幕には出ませんでしたが、先ほど御覧に入れたインタビューの中で、彼はシャーロック・ホームズのモデルはエディンバラ大学医学部の学生だったとき

の恩師、ジョゼフ・ベル (Joseph Bell) 教授だと言っています。ベル先生は外科学の教授ですごいヒューマニストだったそうです。あるとき、患者の毒を吸い取るのに、教授自らの口で吸い取ったため、後に後遺症が残ったという逸話が残されています。ところで、エディンバラにあるベル先生の旧居は今、スコットランド在エディンバラ日本国総領事館になっています。その意味からもベル先生は日本とも縁が深いのです。

ドイルは本来歴史小説作家になりたかったのですが、第二六話でホームズを宿敵のモリアーティ教授と決闘させ、スイスのライヘンバッハ滝で殺してしまいました。そこで、いよいよ歴史小説を書けると思つたのですが、読者が黙っていませんでした。こうこうたる非難の声が出版社に寄せられたそうです。なぜライヘンバッハ滝なのかと言えば、当時、ドイルの奥様は肺結核になってスイスのダボスで転地療養をしていました。肺結核は不治の病といわれていて薬

がなかったものですから、お金持ちたちは空気の良いスイスのダボスへ転地療養をしたのですね。ダボスは、今は世界経済フォーラムの開催地としてよくマスコミに名前が出ますが、トーマス・マンの『魔の山』の舞台になったところでもあります。

スイスにいたドイルのもとにも、やがて読者の強い要望というか、非難の声が届くようになります、ドイルは一作書くことにしました。それが《バスカヴィル家の犬 (The hound of the Baskervilles)》という長編です。しかし、この作品はホームズがスイスのライヘンバッハ滝でモリアーティ教授と決闘して亡くなる前に事件の発生年が設定されていて、ホームズが生き返ったわけではありません。

「ホームズの物語」を久しぶりに読めてうれしいけれども、本当にホームズがロンドンに生還して、また活躍する話を読みたいという読者の強い要望が寄せられて、次にドイルが書いたのが《空き家の冒険 (The Adventure of the

Empty House》という短編です。それでホームズをロンドンに復活させました。

ドイルが再度ホームズものを書くに至った大きな動機というのは、読者の声というよりは出版社から提示された法外な原稿料だったのですね。それがやっぱり一番大きな要素だと思います。というのは、ライヘンバッハ滝は確かにすごい滝ですが死体がそんなに分からないということはないのです。ですからドイルの深層心理の中には、もしかしたら、これだけの金の卵を完全に殺してしまうのはどうかという思いがあったのかもしれない。何も殺すのだったらスイスまで連れていかななくても、ロンドンの街中においてピストルで撃つたり、刺したりしてわざわざ旅費を使う必要もなかったのです。それがスイスのライヘンバッハ滝で死んだか死ななかつたか分からないような書き方をしたというのは、ドイルの深層心理にそういうことが無意識にあったのかもしれない。こうしてドイルは、もう二度とホームズを殺

そうとは思わないで亡くなる三年前、一九二七年まで約四〇年にわたってホームズ作品を書き続けたのでした。一人の作家が四〇年にわたって一人の主人公を書き続けるのは、英国だとコナン・ドイルのシャーロック・ホームズ。日本では先ほど名前を出した大佛次郎の『鞍馬天狗』しか私には思い浮かびません。しかし、一人の作家が長く同じ主人公を書き続けるという点、どうしても主人公にイメージを縛られてしまう。ドイルはホームズを一度殺して、また復活させていますけれども、大佛次郎もドイルと同様、鞍馬天狗を一度殺して、また復活をさせているのです。ドイルと大佛次郎は非常に似通ったところがあるなど常々思っています。こうして、ドイルはもうホームズを殺そうとは思わないですっと書き続けたお陰で、我々は今、この六〇編を読めるという次第です。

「ホームズ物語」に見る英国ヴィクトリア朝
先ほど「ホームズ物語」の魅力は何かについ

て触れましたが、やはり何と言っても、ヴィクトリア朝社会の様子が非常によく描かれているのが大きな魅力だろうと思っております。今、大学で西洋文化史の講義を持っていますが、学生たちに毎回いろいろな面から西洋の、特にヴィクトリア朝の文化についてお話をしています。その中で「ホームズ物語」を教科書に使ったり映像を見せたりしていますが、二一世紀に生きる我々の生活のルーツがヴィクトリア朝にあるということがいくつかあります。

同じヴィクトリア朝の話ながら切り口をいろいろ変えるなど、工夫を凝らして毎回、講義に臨んでいます。例えば学生たちによく言うのが、一〇〇年前のイギリスの生活、文化というのは、決して我々の今の生活とかけ離れたものではないということです。ここで二つ紹介しますと、売れっ子芸能人を「スター」と言います。学生たちに何で彼らをスターと言うと思うかと尋ねると、学生たちのほとんどが「自分たちとは違うところで輝いているから」と言います。

残りの学生は正直に「分かりません」と答えま
すね。

こういうことなのです。ヴィクトリア朝というのは一八三七年から一九〇一年までの六四年間です。ヴィクトリア女王が即位をして統治し亡くなるまでの間です。一八三七年ですから、「一夜(イチヤ)で皆(ミナ)がヴィクトリア朝」と覚えてください。それから女王が亡くなったのは一九〇一年ですから、「即位は遠く(一九トオク)」「老い(〇一オイ)て女王死す」と覚えてください。そうするとヴィクトリア朝の年代がすぐ分かります。

あと、もうこれはホームズと特に関係はないのですが、西暦と明治何年というのを換算するときは〇〇三三と覚えると換算がしやすいのです。一九〇〇年が明治三三年になります。ヴィクトリア朝は六四年間なので昭和と同じ長さです。昭和の初めと終わりでは日本でも世の中が大きく変わったように、ヴィクトリア朝も最初と終わりでは世の中の様子が大きく変

化しました。ヴィクトリア朝の初期には識字率も低く、労働者たちも毎日食うや食わずの生活です。それから決して生活に余裕などありませんでした。それがヴィクトリア朝の中期、一八五一年にはロンドン万博が開かれ、労働者たちの生活も少しずつレベルが上がってくると、人間はやはり生活が豊かになると次に求めるのは娯楽なのですね。末期になるとさらに労働者たちの生活も向上し先ほど紹介した『ストランド・マガジン』を読む人も多くなりました。つまり、雑誌を読む人が多くなったことも一つですが、それまではなかなか行けなかった近場の海へ行くなど日帰りバケーションを楽しめるようになったのでした。貯金をすれば年に一回ぐらいは旅行に行けるようになったのです。

その他、日々の娯楽として彼らが求めたのは、例えば上流階級の人たちはオペラに行ったりコンサートに行ったりするわけですが、労働者階級の人たちはそういうところには行きません。が、当時できたミュージックホールに行く

ようになりました。ミュージックホールというのは、昔の日本ではイメージがちよっと違うかもしれませんが、実際は寄席みたいなところですよ。次から次へといろいろな芸人が出てくる場所で、それまではパブの片隅で芸達者な人が歌を歌ったり楽器を演奏したりしていたものが、時代が少し変わっていったミュージックホールへ出るようになりました。仕事が終わった夕方、飲んだり食べたりしながら舞台上の芸人の芸を見るところで手品をやる人もいれば歌を歌う人もいる、漫才をやる人もいます。チャップリンの映画の『ライムライト』を見ると、ミュージックホールでバレエを踊っているダンサーもいます。

ミュージックホールの黎明期にはいろいろなレベルの芸人がたくさん出てくるのですが、上手な人もいれば素人より少し上手レベルの人もいるわけです。すると労働者たちは遠慮がありませんから、下手だと「引っ込め！」と言うわけです。チャップリンの「チャーリー」と

いう映画にはミュージックホールが出てくるのですが、お客さんが下手な芸人に座布団を投げるのですね。私は座布団を投げるのは大相撲だけかと思つていましたが、ミュージックホールでもそうだったようです。そうすると下手な芸人は今日出てきても次の日にはもう出てこられないのです。本当に上手な芸人だけ、人気のある人だけが毎晩、夕方になると舞台上に立てるといふわけです。

毎晩必ず出てくるというのは空の星と一緒にですから売れっ子芸能人をスターといふのです。月でもいいと思うのですが、やはりスター（星）のほうが輝いているイメージがありますから、芸能人を形容する場合にはいいのかもしれません。

ほかにもヴィクトリア朝のスタイルが今の我々のルーツになつてゐるものの一つが交通体系です。皆さん、御存知のように日本は左側通行です。世界のほとんどの国は右側通行ですが日本と英国、それから英連邦であつたオース

トラリアやニュージールランドは左側通行です。明治の文明開化において、当時の日本政府は世界最強の国だった英国の交通体系を移入しただけです。左側通行は車だけではありません。よく考えると日本の鉄道も左側通行です。私は横浜に住んでいます、横浜から東京へ向かう電車も左側を走っています。山手線も同様で左側通行になります。

では、なぜ英国が左側通行なのかといへば、英国で聞いた話では英国人は日本人と同じで圧倒的に右利きが多く、馬車の馬を鞭で叩くときに、もし右側を走っていると、ロンドンには御存知のように道がすごく狭いので右側を歩いてゐる人を叩いてしまうかもしれない。それから、道が狭いと店頭のを壊してしまうかもしれないということ、左側通行にしたそうです。そうすると、右側が空くわけですね。

以上が左側通行の理由ですが、この話を学生にしましたらある学生が、同じアングロサクソンの国、つまり英国人が米国に移住していった

のに、なぜ米国は右側通行なのかという質問をしてきました。話はちよつとそれですが、その学生はユニークな学生でした。今日、学生たちにレポートを出すと図書館に行かないで直ちにインターネットで調べます。レポート課題を出したときには必ず図書館に行き本で調べてレポートを書くように学生たちに言いましたら、彼は実行したらしく、彼のレポートにはこう書いてありました。「図書館に行き本で調べて来ました。それでこのレポートを書いていきます。ただし、大していい参考書がなくてお粗末なレポートになり申し訳ありません」とこう書いてあるのです。すごく謙虚な学生だなと思つて彼のレポートを読んだのですが、引用のオンパレードではなく、きちんと自分の言葉でいろいろ書いてあつて、最後に、参考文献のところを見ましたら何と私が書いた本が書いてあるのです。そうか、お粗末な参考書というのは私の本だったのかと。

でも、自分が調べたことで何が分かつて、そ

の結果、自分がどう思ったかをきちんと自分の言葉で書いてあつたので私は良い成績を彼にあげました。彼の質問は、繰り返しになります「なぜ米国は右側通行なのか」ということです。いつも、左側通行の説明をすると、皆それで納得して質問は出ないのです。しかし、彼はそういう質問をしたので、私は、彼は目のつけどころが鋭いと思いました。質問に対する回答はこういうことです。世界の国は、昔はほとんど左側通行だったのです。ところが、あるときナポレオンは、これは戦争のときですが、戦場では彼は敵の右側から攻めていくことが多かったようです。ナポレオンの軍隊は高度な訓練をされていて右側から攻めたらそれが勝因になつたことが何度かあつて、それがもとでナポレオンはフランスの交通体系を右側に変えたのです。フランスは当時、ヨーロッパの列強国です。フランスにならつてヨーロッパ大陸の国々は右側通行にしていったのだと言われています。

では、なぜ米国はというと、米国が英国と独立戦争をしたとき、米国の味方をしたのがフランスでした。それもやはり米国は仏国に恩義を感じたということもあるのかもしれない。そこで結果的にフランスの交通体系を入れて右側にしたということがあります。

そのような経緯から、現在では世界の交通体系は右側通行が主流ですが、「ホームズ物語」をよく読むと、ただ単に探偵が名推理で犯人を捕まえるというだけではなく、当時の生活の様子とか人生の機微が上手く描かれているということが大きな魅力の一つではないかなと思います。

「ホームズ物語」は何も活字の世界だけではなくて、映像の世界や広告の世界、演劇などいろいろな分野に広がっています。ドイルとバルトンの話に入る前に寄り道が多くて申し訳ないのですが、先ほども申し上げたようにドイルは探偵小説だけではなく、歴史小説、冒険小説、SF小説など広い分野の小説を書いています。

今日はせっかくお越しいただいたので、家で本を読んでいるだけでは分からないような珍しい映像をご覧に入れようと思いついてまいりました。

コナン・ドイルの実像と虚像

コナン・ドイルという人物を見ていくときに、ウィリアム・キニモンド・バルトン（バートン）と出会った子ども時代は別にして、次の三つの面から見ると非常に分かりやすいと思います。医者としてのドイル、作家としてのドイル、最後が心靈主義者としてのドイルです。特に、最近注目をされているのが心靈主義者としてのドイルのような気がします。それについては後ほどお話ししますが、その前に、作家としてのドイルを見てみましょう。

彼が『ストランド・マガジン』にシャーロック・ホームズ・シリーズを書いて大当たりをしたのは事実です。そもそもドイルがホームズ・シリーズを書くに至った動機ですが、いま定説

として言われているのはこうです。彼はロンドンで眼科の医院を開業したものの待てど暮らせど患者が来なかつた。そこでエディンバラ大学医学部時代の恩師のジョゼフ・ベル先生を思い出して、ホームズモデルとして使い作品を書いたらこれが大当たりした、というものです。

ドイルはエディンバラで生まれて成人するまでエディンバラで育つたわけではなく、ストニーハースト校在学時に一時ドイツに留学をしていたことがあります。エディンバラ大学医学部入学のためエディンバラに戻ってきて、卒業後、紆余曲折を経てポーツマスで開業をします。そのときにコッホがツベルクリンを発見したということで、ドイルは突然ドイツへ出掛けに行くのです。と言つても、ドイルは一町医者に過ぎませんから英国内で医学の最先端の勉強をしたわけではありません。しかし、彼はドイツへ行くにあたって英国の新聞社としっかり契約をして、帰国後、ツベルクリン関連の記事を書くことを取り決めていたのです。ドイ

ルが医者としても有能だった証拠は、ツベルクリンは決して結核を治す薬ではなくて、結核にかかっているかどうかを見極める薬に過ぎないことを英国の新聞に書いていることです。

結果的にそれが正しいことが分かつたわけですが、その後、ポーツマスの医院を廃業して自分はウィーンに留学をするのだと言ひ出します。一八九〇年一二月にウィーン大学の医学部に留学をしますが、わずか三カ月後の一八九一年三月には英国に帰国しています。というのも高校時代にドイツ留学をしていたことから日常会話的なドイツ語はしゃべられるのですが、決して医学の専門用語を熟知していたわけではなく、当時、世界のトップレベルといわれたウィーン大学医学部の授業にはついていけなかつたからです。そして、三月二四日にロンドンに帰ってきて四月一日からロンドンで眼科医院を開業します。これからレジユメにある「ドイルの実像と虚像」のお話に入りますが、結論から言えば、先ほど言ったホームズ・シリ

ーズ執筆の動機は間違いだということ。何が違うかと言えば「眼科医院を開業したものの、待てど暮らせど患者が来なかったからホームズ・シリーズを書き始めた」という点です。ドイルが文芸エージェントのアレキサンダー・ポーロック・ワットに最初の短編作品である《ボヘミアの醜聞》(A Scandal in Bohemia)を送ったのが四月三日です。次の《花婿失踪事件》(A Case Of Identity)を送ったのが一週間後の四月一〇日です。さらにその一〇日後、四月二〇日には《赤毛組合》(The Red-Headed League)を送っています。

ですから一作を書くのに大体一週間から一〇日かかっているのが分かります。ということでは四月三日に代理人に原稿を送るということは、もうすでに三月下旬から原稿を書き始めていないと送ることはできません。以上のことから、待てど暮らせど患者が来なかったの、ベル先生を思い出してシャーロック・ホームズの短編小説を書いたというのは嘘になります。で

は、なぜそのような定説が誕生したのかと言えば、ドイルの自伝を世界中の研究者が鵜呑みにしたからです。ドイルが「自分は四月一日から眼科医院を開業したけれども瞑想と仕事にこくない場所があるだろうか」という抽象的な書き方を「待てど暮らせど患者は来なかったから」というふうに世界中の研究者が理解をしたからなのです。

さらに、なぜ自伝でドイルはそんな書き方をしたかという点、おそらくドイルはもう初めから眼科医院を経営するつもりはなかったのだろうと私は思っています。ただ、ポーツマスで医院を廃業したときに、周囲に自分はロンドンで眼科医になるのだと方々で言ってしまったのではないのでしょうか。それで送別会をしてもらって饞別ももらったから開業しないわけにいかなくなったのではないかと想像しています。彼がいつ第一作を書き始めたのかというと、おそらく三月二〇日です。《ボヘミアの醜聞》の中の一節に「三月二〇日に往診に行った帰り」

というふうには、ぽろっと日付が出てくるのです。これはやはりドイルの深層心理の表れだろうと思っっています。

もう一つ、一般的に言われていることで事実と違うのは、ドイルは第一次世界大戦で自分の息子や弟を亡くし、その前には奥様も亡くしているのです、その人たちともう一度交信をしたかったという動機から彼は心霊主義者になったと言われています。昔、テレビ番組の監修を頼まれました、実は『知ってるつもり?!』という番組なのですが、当時、私は、ドイルは早い時期から心霊主義者だったのだと言ったのですが世界の定説がそうではなく、結局、ドイルは第一次世界大戦で自分の息子や弟を亡くしたことから心霊主義者になったという描き方をしていました。

過日、『幻解！超常ファイル ダークサイド・ミステリー』というNHKの番組の監修の一部を頼まれたとき、これから皆様に御覧に入れる先ほどのインタビュールムの続きを

NHKのスタッフに御覧に入れて、NHK側も納得をしてくれました。時々、ドイル関係の番組の中で、このインタビュール映像を部分的に紹介することはありますが、おそらく全編を上映するのは珍しいことと思います。

話は変わりますが、ドイルのお父さんはチャールズ・アルタモント・ドイルといえます。彼は建築職の公務員でしたが、これは世を忍ぶ飯の姿で本当は画家になりたかったのです。実は、このお父さんがいたからこそドイルがバルトンと出会うことになったというお話です。ドイルのお父さんの兄弟は、絵の世界ではかなり有名な人がたくさんいました。ドイルのお父さんの兄弟で長男のジエームズは有名な聖職者、次男のリチャードは『パンチ (Punch)』誌の表紙を描いた人気画家、三男のヘンリーは漫画家でスコットランドの美術館館長、四男がコン・ドイルのお父さんです。

日曜画家として絵を描いていたチャールズですが作品は少しも売れませんでした。こうい

う妖精の絵を描いていました。今なら人気を得るのかもしれませんが、当時は非常にグロテスクな絵だと受け止められていました。小さな女性と大きな鳥が並んで立っている絵とか、花嫁衣装を着たガイコツとか、そのようなグロテスクともとれる絵をたくさん描いていたのです。ですから、これが売れるはずもなく、お父さんはだんだん酒に溺れていきました。今ご紹介したように、お父さんの兄弟は絵の世界で活躍をしていました。ですから、そういう著名人のコネを使っても絵の世界で名前を出せなかったということ、お父さんはだんだんアルコール依存症になったのです。ですから子ども時代のドイルは、経済的にも苦しいし家庭の中で精神的にも安定はしていなかったのです。一八五九年五月二日生まれのドイルはエディンバラ市内で頻繁に引越しをしております。ピカードイ・プレイス一一番地で誕生して三歳までここで育ち、三歳から五歳まではポートベロのタワーバンク三番地、五歳から七歳まではサイエネ

ス・ヒル・プレイス三番地、七歳から九歳まではリバトン・バンク・ハウス、一六歳から一八歳まではアーガイル・パーク・テラス二番地、一八歳から二二歳まではジョージ・スクエア二三番地、二二歳のときはロンズデール・テラス一五番地と七回引越しをしております。

お父さんのアルコール依存症はだんだんひどくなっていく。最初は一週間のうち三日ぐらいは役所に行っていたのが、だんだん行けなくなり一週間のうち五日ほどは自分のベッドから出られなくなり最後は自分の名前も言えなくなつたそうです。そこで、お母さんはお父さんをアルコール依存症で精神病院に入院させてしまうのですが、これも最近になつて分かつたことです。

一八六六年、ドイル九歳のときにお母さんがお母さんの友達であつたメアリー・バートンという女性の家にドイルを預けます。これがリバトン・バンク・ハウスというところですが、表向きにはニューイントンアカデミー小学校に

入るドイルのため、学校に近いリバトン・バンク・ハウスにドイルを預けたのです。そのリバトン・バンク・ハウスのオーナーがメアリー・バートンでした。どこでドイルのお母さんがメアリー・バートンと出会ったかは分かりませんが、しかし、幾つかの状況的な記述を見ると、夫のアルコール依存症で苦しい生活をしていたお母さんでしたが、熱心な文学少女でもあったことから、図書館に通ったり地元の文学愛好会に入ったりしているいろいろな人脈ができたようです。ちなみに、ドイルもお母さんの影響で本が好きになったということがありますが、その文学愛好者の会を通じてお母さんはメアリー・バートンと出会ったらしいのです。

メアリー・バートンはエディンバラでも女性の先駆的な教育者であり、女性の権利拡大のために運動した一人です。その家にドイルは七歳から九歳まで二年間預けられました。メアリー・バートンのお兄さんがジョン・ヒル・バートンです。ジョン・ヒル・バートンはスコット

ランドの歴史家であり有名な文化人の一人でもあったわけです。メアリー・バートンの家に預けられたドイルは彼女のお兄さんのジョン・ヒル・バートンの家に遊びに行くようになりました。

いつから、どういうことかということは不明ですが、こうしてジョン・ヒル・バートンの家に遊びに行くようになったドイルは、そこでバートンの書齋にも出入りするようになり、彼の本を読むようになりました。もちろん、子どもですからそんなに難しい本は読めません。でも、そこでいろいろな写真の付いた本を見るようになってドイルは冒険心を膨らませたのです。

終生の友バルトン

もう一つ、ドイルがジョン・ヒル・バートンの家に出会ったのがウィリアム・キニモンド・バートンでした。日本ではバルトンといわれています。なぜ日本ではバルトンといわれているのかと思って官報を調べました。そこで、明治

二〇年五月三〇日の官報を見ると、これがバルトンという名前の由来ですが、「帝国大学工科大学衛生工学教師トシテ英国ヨリ招雇セルダブリュー、ケー、バルトン」と書いてあります。官報にバルトンと書いてあるのですね。それがもとなっていてバルトン自身、特に自分の名前はバルトンだとも主張しなかったようなのでバルトンが定着したという次第です。

W・K・バルトンとドイルは、ジョン・ヒル・バルトンの家でお会いしました。バルトンの方がドイルより三歳年上だったので、二人は気が合いました。後年、バルトンは東京帝国大学衛生工学の教師として日本にやって来ます。バルトンのすごいところは日本各地の上下水道の計画をただけではなく浅草十二階の設計もしたことでした。その他、自分の専門以外にバルトンが活躍したのは写真の分野でした。バルトンは日本写真協会の創立者の一人でもあったのですが、日本写真協会が一八八九年に東京で創立されたのはバルトンとジョン・ミル

ンの熱意によるところが大きかったようです。同協会の歴史には次のような記述があります。「協会は直ちに成功を収め、日本で活躍している代表的な写真家たちを見事に引きつけ、今日に至るまで活動を続けている」というものです。バルトンは写真を趣味以上にやっています。本各地の写真を撮って歩き、それを英国の出版社にも送っています。英国の出版社は原稿料をバルトンに直接送ったわけではなくてドイルに預けているのです。英国の出版社もバルトンとドイルのことを知っていてバルトンの原稿料をドイルに預けドイルからバルトンに送っていることが分かります。

バルトンは日本各地の写真を撮っています。が、年末には奈良の正倉院にも出掛けて中を見えています。「ホームズ物語」には日本に関する記述もいくつかあるのですが、その記述のもとになっている情報は恐らくバルトンから得たものだろうと思います。また、日本に関する記述だけでなく写真そのものに関する記述が「ホ

「ホームズ物語」の中にはいくつか出てまいります。当時、写真は今みたいにデジカメで何でも簡単に撮れるというものではなくて銀塩カメラで撮っていました。さらに、近所に写真屋がある訳ではないので自分で現像までしたのです。ですから写真に関する知識と技術がないと写真という趣味はなかなかできなかつたのです。それにもかかわらず「ホームズ物語」の中には不思議なくらい写真に関する記述が多いのです。これもやはり、バルトンの写真趣味がドイルに大きな影響を与えているのだらうと思います。こういうことを知らなくても「ホームズ物語」は十分楽しく読めます。楽しく読めるけれども、バルトンとドイルの関係が分かつたうえ、バルトンの写真技術は趣味以上であり、当時の日本の地震被害の状況を撮ったり、あちこちの日本の風景や庶民の生活を撮ったりして、日本についての情報をドイルに伝え、ドイルがそれを「ホームズ物語」に使っているのだと知ると、一層「ホームズ物語」に対する興味がわいてく

るといふものです。

「ホームズ物語」に登場する写真関係の記述をいくつか挙げてみましょう。例えば《赤毛組合》という事件ではジョン・クレイという犯人がヴィンセント・スポールディングという偽名のもと質屋の店員になります。この話は、質屋の地下から銀行の地下室までトンネルを掘り、地下室に保管されている金貨を盗み出そうという荒唐無稽なプロットですが、地下室に潜り込む理由についてスポールディングが主人のウィルスンにした説明は「写真を趣味としているから自分は地下室に入って現像する」というものでした。こういうふうには写真が登場するのです。さらにまた、《ブナ屋敷 (The Adventure of the Copper Beeches)》に登場するジェフロ・ルーカッスルも写真が趣味だと言っています。今お話したように、当時、写真は誰でも簡単に趣味として楽しめる時代ではないとくに、主人公のジェフロ・ルーカッスルも「自分には写真の趣味があり、あの鎧戸を下ろした

空き部屋は暗室として使っている」と、こう言
つて、実際は違うのに写真を「言い訳」に使っ
ております。

また、ホームズ自身は、写真はただ単に風景
を写すだけのものではないと言っています。
《ライオンのたてがみ (The Adventure of the
Lion's Mane)》という作品はホームズが探偵
業を引退したあとの事件として描かれている
のですが、一九〇七年に彼が移り住んだサセツ
クス海岸で事件が起きます。ホームズは遺体
に付いている傷の拡大写真を地元の警察官に
見せて、写真を捜査の材料として有効に使っ
ている実例を示しているのです。これもやはりバ
ルトンが、ただ単に興味で写真を撮るだけで
なくて、災害状況など当時の日本の様子を報道
記録写真のように撮ったものをドイルに送っ
たということが、案外ドイルのヒントになっ
たのではないかと思っています。

また、ドイルの諸作品にはバルトン親子も
別々にですが登場します。二作品に出てきます

が、最初に登場するのが一八八二年五月号の
『ロンドン・ソサエティ』という雑誌に掲載さ
れた「わが家のダービー競馬 (Our Derby
Sweepstakes)」です。これにホームズは出て
きません。この作品の中でドイルはこう書いて
います。「昔、ジャックはハザリーの小川で釣
った死んだ魚を私にくれたことがあったのを
覚えていて。私はその魚を、私の宝物の中で一
番大切にしまっておいたので、やがて家中に匂
いが立ち込め、母がバルトンさんに苦情の手紙
を書いた。すると、バルトンは、お宅の排水装
置は申し分ないと言ったものだ」と、こういう
一文です。これは明らかにウイリアム・キニモ
ンド・バルトンのことを指していて、彼が衛生
工学の技術者であったことから「バルトンさん」
という名前が出てきたのだと解釈できます。

もう一つ、これもホームズの作品ではないで
すが、「ガードルストーン商会 (The Firm of
Girdlestone)」の冒頭には明確に「ウイリア
ム・キニモンド・バルトンに捧げる」という謝

辞が書かれています。これは一八八二年五月に発表されたもので、ドイルは当時ポーツマスで医者をしていた頃の作品です。その他、一九二五年の『ストランド・マガジン』二、三月号に掲載された《高名な依頼人 (The Illustrious Client)》には父親のジョン・ヒル・バートンの名前が見られます。ドイルは一九三〇年に亡くなっていますから、この作品は亡くなる五年前、六十歳を過ぎてからのものです。中にこういう一文があります。「ホームズは私(ワトソン)に名刺を渡したが、それには『医学博士ヒル・バートン、ハーフムーン街三六九番』と書かれていた」というものです。これはホームズがワトソンに言った台詞ですが「ワトソン、これがきみの今晚の名前だ。グルーナー男爵を訪ねてくれたまえ」とこう言っています。グルーナー男爵というのは妻殺しの疑惑がある男で、その男にメルヴィル將軍の娘ヴァイオレットが心を奪われてしまいます。依頼人の使いとしてやって来たデマリが言うには「彼女は男爵と

の結婚を望んでいるが、悪魔の毒手から彼女を守って欲しい」ということでホームズが事件に乗り出すという話です。グルーナー男爵が美術の愛好者、美術品の収集者だと分かっていますので、そこで、ホームズはワトソンにヒル・バートンという偽名の名刺を持たせ、美術収集家だというふれ込みでグルーナー男爵のところへ行かせるのです。この作品を書いたときドイルはもう六〇歳を過ぎていましたが、子どものときに世話になったヒル・バートンの名前がこうして何十年も経ったあとに作品中に出て来るということは、いかにドイルが終生バルトン親子に感謝の念を抱いていたかが分かります。繰り返しになりますが、以上のことを知らなくても「ホームズ物語」は十分に楽しめます。しかし、こういうウィリアムとの経緯を知ると、ちよつとした名前の出現で物語を二倍も三倍も楽しめるのです。ウィリアムのお父さんのヒル・バートンはスコットランドでも名士でしたし、ウィリアムは家庭的にも経済的にも恵まれ

た家庭の子どもでした。一方、当時、ドイルのお父さんは公務員でもアルコール依存症で生
活的にも精神的にも苦しい環境にありました。
ですからウイリアム・キニモンド・バルトンと
ドイルというのは家庭的には全く違う環境で
あり、ましてや年齢差も三つあったわけですが
ふたりは生涯の友になったのです。

バルトンは日本で浄水場の建設や下水道の
仕事をして各方面で業績を残しますが、残念な
ことに四十代で亡くなってしまいました。もつと
多くの仕事をしてもらいたかったと思います。
この親子をドイルはずっと死ぬまで忘れず、そ
の恩を感謝し続けたことが作品からも覗える
のです。私事で恐縮ですが、今、私は趣味でホ
ームズの研究をしています、大学では土木工
学を学びました。それも研究テーマは「推理学」
ならぬ「水理学」でしたから、バルトンとは「ゴ
ジラとゴリラ」ほどの違いはあるものの同じ分
野の仕事をしたというだけで、ちよつとだけ
誇らしくなりません。上水道工学、下水道工学、

衛生工学が人間の生活にどれだけ恩恵を与え
るか是一般の人より少しは分かるつもりです。
毎日、我々が当たり前のように使っている上下
水道ですが、バルトンが日本に来て各地で仕事
をしてくれたという、その有難さが分かります。
実は、ドイルも自分は土木技術者になりたかつ
たということを言っているエッセイもありま
すが、これなどは、もしかするとバルトンの影
響だったのかもしれない。バルトン親子は生
涯を通じてドイルの精神的な支えになつてい
たことから、二人がいかに大きな影響をドイル
に与えたかが分かります。

今日の資料の中に、ドイルが七歳のときに預
けられたリバトン・バンク・ハウスの現在の写
真を付けました。これは清水健さんというロン
ドン在住のシャーロックアンが撮った写真で
すが、この建物は、実は一時、取り壊される運
命にあったのです。具体的には、あるハンバー
ガー店に変わる計画があったのですが、取り壊
される寸前になって、実はここはかつてメアリ

ー・バートンが住んだ家であり、さらに、子どものときドイルが預けられた家だと分かって、いろいろな人の協力を得て壊されずに済んだという次第です。

この写真からは分かりませんが、現在はダニール・デン・スクールという小規模な学校になって



ドイルが7歳の時に預けられたリバトン・バンク・ハウス現在の様子（撮影：清水健氏）

います。個人の家を使っているくらいですから決して大きな組織ではありません。現在は心に傷を負った子どもたちが預けられている学校のようなです。ドイルが子どものときに預けられたメアリー・バートンの家が今も子どもたちの精神的な支えになっているということは、メアリー・バートンの力というか、彼女の思いが今でもつながっているような気がしてなりません。この学校の付近にはドイルの名前を冠した診療所もあるとのこと。

かつて、ある大学の公開講座で「ホームズ講座」をやったときに、スコットランドのことをドイルはどういうふうに思っていたかという質問をいただいたことがあります。残念ながら、スコットランドに関する記述はそれほど多く「ホームズ物語」には出て来るわけではありません。事件の舞台になったこともありませぬ。ドイルがエッセイで、「自分はスコットランドについてこう思っている」ということも書いていません。ドイルが文壇にデビューをさせても

らったのはロンドン、つまりイングランドです。ゆえにドイルはイングランドに恩義を感じていたのかもしれませんが。ただ、彼がスコットランドに強い誇りを持っていたのは間違いないと思います。バルトンとの思い出もあり、少ないながらも、例えば『海軍条約文書事件』には「ハドスン夫人はスコットランド人ではないけれども、スコットランド人女性と同じぐらい料理が上手だった」とか、『恐怖の谷』には「アレック・マクドナルド警部はスコットランド生まれでアバディーンなまりがあった」など、「ホームズ物語」には八カ所、スコットランドに関する記述が出てきます。

本日のお話の最後に、世界初のホームズ映画を御覧に入れます。これは一九〇三年に米国で製作された作品ですが映画というには余りにも短く、わずか三一秒の映像です。ある映画雑誌を見ていましたら、映画評論家の筈見有弘さんが書いたエッセイの中に「一九〇三年、早くもホームズ映画の第一作がつけられたのであ

る」『シャーロック・ホームズ裏をかかれる (Sherlock Holmes Baffled)』と題された作品だが、このフィルムは現存しないために謎にまつまれている」と書かれているのを見つけました。この幻の作品を、かつて米国のシャーロックキアンが見つけ出しVHSテープを私に送って来てくれたことがありました。よく「映画の歴史はホームズ映画の歴史」などと言われます。昨今、映画を観に行くのと「今の映画はこんな映像だって創り出せるのですよ」と言わんばかりに映像ばかりがすごくて内容が追い付いていないものがたくさんあるような気がします。しかし映像の持つ力というのは、やはり舞台ではどうしても表現できない魅力があるのも確かです。それでは、まず映像を観ていただきましょう。この作品は一九〇三年に米国のアメリカン・ミュートスコープ・アンド・バイオグラフィカンパニー社が製作したもので、当時はスクリーンに映す形式ではなく、各人が箱をのぞきこんで映像を観るものでした。これは私の勉強不

足かも知れませんが登場する俳優の名前も監督の名前も分かっています。もしご存じの方がいらつしやいましたら、是非御教示ください（「シャーロック・ホームズ 裏をかかれる」を上映）。

御覧のとおり内容は単純です。卓上のカップらしきものを男が大きな袋に入れる場面で映像が始まります。四個目を入れたところで右奥のドアが開き、葉巻をくわえガウン姿のホームズが入って来ます。彼が男の肩をたたくと男がパツと消え、ホームズが椅子に座り葉巻に火を付けた瞬間、今度は突然テーブルに腰掛けた男が出現します。驚いたホームズがのけぞり、葉巻の煙がモクツと上がると、男がテーブルから降りて逃げるといふ展開です。こんな場面が繰り返され最後に男が消え、ホームズが「やれやれ」といふふうに向手を上げて「映画」が終わるといふものでした。物語性などありませんが、人や品物が瞬時に現れたり消えたりするのは映像ならではの特技と言えましょう。

御覧のようにこれはサイレント映画です。サイレント映画では俳優が台詞をしやべる必要がなく、ルックスさえよければ英米人である必要はなくフランス人でもよかったです。実際の初期のホームズ映画でホームズ役を演じた一人はフランス人のジョージ・トレヴィーユという俳優でした。その他、お話ししたいことはたくさんあるのですが、今日は「ホームズ物語」の概要とドイルとバルトンの友情、最後に世界初のホームズ映画を御覧いただきました。これを契機に皆様も今一度「ホームズ物語」を楽しんでいただければ幸いです。御清聴ありがとうございました。

質問① コナン・ドイルがロンドンで住んでいた住所は分かかりますか。

田中 ウィーンでの眼科の勉強に挫折したドイルは一八九一年三月に帰国します。ロンドンで下宿と眼科医院用の診療所を探し、その結果、下宿場所として決めたのがモンタギュー・プレ

イス二三番地、医院として借りたのがアップパー・ウインポール街二番地でした。その後、同年九月には、ロンドン中心部から郊外へ列車で数分のサウス・ノーウツド、テニス・ロード一二番地に移っています。一八九三年には妻の肺結核治療のためスイス・ダヴォスへの転地療養に同行しますが、翌年帰国すると再度、サウス・ノーウツドの家で生活を始めました。一八九七年には妻の病氣療養のため空気の良いサリー州、ハインドヘッドに大きな家を建て、「アランダールショー」と名付けました。一九〇六年に妻が他界するとここを売り払い、翌年、ドイルはジョン・レッキークと結婚してイースト・サセックス州クロウバラに居を構えました。結局、ドイルがロンドンで暮らしたのはサウス・ノーウツドまででしたから、途中のスイス暮らしを含めても約六年という短い期間でした。

質問② マニアックなことを聞いていいですか。第一次大戦以前からの心霊主義というのは研究も数多くあり、ロバート・ルイス・ステイ

ブンスンが手紙の中で「きみの住所は、お互いが入っている心霊協会の名簿から見たよ」というのがありますが、この心霊協会とはSPRのことですか。

田中 SPR (The Society for Psychological Research)、心霊現象研究協会のことだと思えます。心霊研究協会と訳している本もあります。一八九三年一月、当時三四歳だったドイルは父チャールズの死後一カ月に入会を申し込んでいます。ステイブンスンとドイルはエディンバラ大学の同期です。

質問③ ドイルは心霊主義者ということで知られておりますけれども、心霊主義者というのは何となく精神がエキセントリックとか偏っているような印象を受けます。ドイルはアマチュアですがゴルフアでもありました。地方の二つのクラブに所属してキャプテンも長いことやっております。ゴルフアがそういう心霊主義に偏るといふのは不思議に思うのですが先生はどう思われますか。

田中 非常にいい質問だと思います。心霊主義とひと口に言っても心霊主義を科学的に研究しようというグループと、自分は心霊主義者だと言つて霊の存在を妄信しているグループに分けられると思います。当時のケンブリッジ大学のグループは心霊主義を科学的に研究していたのですが、ドイルはといえば後者で完全な心霊主義者なのです。先ほども申したように彼は医者ですから、科学者であるドイルが心霊主義者になつたのはなぜかという疑問も残ります。

ドイルがポーツマスで開業医をしていた頃、初期の患者の一人がドレイスン將軍という人で、英国における心霊主義者の草分け的な人だつたのです。ドイルも彼に誘われるまま何回か降霊会に行つています。降霊会は土地の人を集めて降霊術、例えば霊媒の口や霊媒を書くペンを通して亡くなつた人と話をするといったイメージの会です。半信半疑で何回もドイルは行つていますが、彼が心霊主義を信じるようにな

つたのは、ドイルが密かに読もうと思つていたレイ・ハント (Leigh Hunt: 1784-1859、詩人、随筆家) の著作、自分しか知らないはずの作品を霊媒が「この方は治療を施す人ゆえレイ・ハントを読んではいけない」とペンを通じてメッセージを書いたことからだと言われています。そのときドイルが読もうと思つていたのは『王政復古の喜劇作家たち』(一八四二)という作品で、ドイルが書こうとしていた歴史小説『マイカ・クラーク』の参考になると思つたようでした。ただ、その前段としては先ほどもお話ししたように、お父さんがアルコール依存症で精神病院に入院したりして、ドイルは熱心なカトリック教徒だったので、いろいろと辛いことが次から次に起こり、私は、ドイルは「神も仏もあるものか」的にカトリックを捨てたのではないかと思つています。それが結果的に彼を心霊主義に走らせたということでもあるのではないかなと思つています。しかし、彼はカトリックを死ぬまで捨てきれなかつたと私は思つてい

ます。というのは、ドイルは心霊主義の立場からキリスト教における奇跡を擁護している場面があるからです。つまり、キリストが行った奇跡自体はドイルが信じているふしがあるのです。

科学者としてのドイルと心霊主義者としてのドイルは非常に矛盾しているように思えますけれども、スコットランドのエディンバラはケルト文化の非常に強いところですし、熱心なカトリック教徒の家に生まれながら度重なる不幸に信仰がゆらいだことなど、そういったものを総合的に考えるとドイルが心霊主義者になったというのも分かるような気がします。

(二〇一五年八月八日)

*田中喜芳(たなかきよし)シャーロック・ホームズ／コナン・ドイル／ヴィクトリア朝研究家。

(米国)ニューポート国際大学大学院客員教授。関東学院大学文学部、早稲田大学の講師。人間行動学博士(P.h.

D)。日本病跡学会会員。日本推理作家協会会員。鎌倉ペンクラブ会員。一九八七年、世界で最も権威あるホームズ研究団体ベイカー・ストリート・イレギュラーズ(米国、BSI)に故長沼弘毅博士に次ぎ、ふたり目の日本人会員として入会を許可される。現在、日本シャーロック・ホームズクラブ(JSHC)、ロンドン・ホームズ会(英国)など、各国三四の研究団体に会員・名誉会員として在籍する。近著に『シャーロック・ホームズ／ヨコハマ／イギリス』(ハリツ・ソサイエティ・オブ・ジャパン、二〇一六)など著書・翻訳書多数がある。